

Opinion

世界女子サッカー選手権を 取材して

杉山圭子

サッカーのことはほとんど知らなかった私が昨年末、いきなりサッカー担当を命じられた。今年6月の女子サッカー世界選手権（6月5日・スウェーデン）の取材に間に合うようにとのこと。勉強不足のままに出発の日はやって来た。

女子サッカーは来年のアトランタ五輪から正式種目となる。その五輪出場権をかけた今回の世界選手権。予選リーグでの日本の初戦当日、カールスタッドという小さな町のグラウンドに顔を出すと代表歴14年の木岡二葉選手（29）が声をかけてきた。「えっ、来たんですか」。

1991年の第一回世界選手権（中国）に出場を決めた時は、多くの新聞が「男子より先に世界へ」と騒いだにもかかわらず、現地へ取材に来た記者はいなかったそう。今回は「五輪初採用」のニュース性で6社が記者の派遣を決めた。

さて試合では、日本代表は予想以上の活躍で、五輪出場権を手にした。準優勝国となった強豪ドイツに0-1の惜敗、前回敗れたブラジルには2-1で逆転勝ち。前回の3戦全敗（無得点）に比べると格段に進歩した内容だった。

現在、選手のほとんどは企業の社員である。五輪採用が決まって以降、サッカーに専念できるようにと、木岡選手ら主力の多くは契約プロとなった。正社員の場合でも仕事は午前中のみなどの配慮がされている。「五輪」と聞いて対応が変わったのは、新聞社と名のつく企業だけではなかったようだ。



▲インタビューを受ける木岡選手

しかし、目標を達成したあとの選手たちは、自分たちの立場を冷静に受け止めていた。「サッカーを続けていて何になるのかわからない時代が長かったし、自分の将来のプランはまだ浮かばな

い」とは前出の木岡選手。野田朱美主将（25）も2得点を挙げながら、「感動しているのは私たちだけかもしれない。日本でどう評価されているかは、帰ってみたいとわかりません」と話した。

「女子サッカーの可能性はまだ未知数。選手の待遇も、横（他企業）をうかがいながら決めているようなところがある」とチームを持つある企業の人事担当者。

定着に必要な長い年月

面白いと感じたのは、女子サッカーの立場が揺れているのは日本だけではないことだ。早くから国ぐるみの強化が盛んなのが米国と中国。それこそ「男子よりお先に」という感じだが、今大会で連覇を逃した米国の関係者には「現在は男子のプロ化に関心が集まり、女子の問題は飽きられている」といった悩みもある。一方で、欧州や南米など、強い男子の陰で女子を冷遇するきらいのあった地域の中には、女子の強化に本腰をいれはじめた国もあり、将来地図は世界的にも未知数なのだ。

男子の競技に女子が進出して成功した代表例はマラソンだろう。女子の五輪採用は84年のロサンゼルス五輪から。日本中の期待を背負って出場した増田明美さん（31）が最近、当時を振り返って「ただ記録を求められ、自分から考えまなくて、いい結果が出ないことに気づく余裕がなかった」と語っていたのが印象的だった。

それから8年を経た92年、バルセロナ五輪に出場した有森裕子選手（28）や山下佐知子選手（31）は、いずれも「自己実現の手段」と競技の意味づけを明確にするところから始め、有森選手はメダル獲得後の燃えつき症候群も自力で克服、マイペースを確立させて、五輪連続出場に近づいている。女子サッカー選手たちの立場や考え方も、年月を経て、進化していくに違いない。

新聞記者になって8年半。うち女性の同僚がいた期間が1年に満たず「女担当」のように扱われて不満だった時期もあったが、今は男性より女性の取材からより多くを学んでいると感じる。女子サッカーLリーグ事務局員で初代日本代表の本田美登里さん、テニスの井上悦子さん、スケートの橋本聖子さん、柔道の山口香さんら、今を支えた女性選手に自分と同学年が多いことにも気づき友人や自分の現在と重ねつつ、取材を楽しんでいる。

〈すぎやま・けいこ〉 WSFジャパン会員、朝日新聞社運動部記者（主にテニス、サッカーを担当）